



利根町南郷地区の「南郷の曲屋」と呼ばれる旧鈴木家住宅。2004年に市重要文化財に指定され、そば打ちなどの体験もできるかやぶき屋根の古民家です。関東ではめずらしいと注目される造りや、曲屋を守り、人と地域とのつながりの温かさを伝えていく人たちを紹介します。

特集

かやぶき古民家 歴史伝えて



母屋はかやぶき屋根で、東北地方の岩手県など寒冷地域に多く見られるL字型に張り出した曲屋形式。土間から突出したL字の部分は当時、馬小屋として使われ、いろいろからの暖気が馬小屋へ流れ込んで馬を温めていました。現在もいぶして建物の傷みを抑えたり、いろいろを囲んで交流を楽しんだりと活用しています。

鈴木家の祖先是熊野神社の神官を務め、紀州（現在の三重県）より当地に落ち着き、日影南郷村の原形を築きました。主に養蚕をなりわいとし、母屋2階に蚕室を構えていました。蚕室



曲屋の入口の引き戸から古川さんがお出迎え。縁側は雑誌撮影などのメイン写真として使われることが多い

の風通しを良くするために屋根に設置された越屋根は現在も残り、絹産業に関わる建造物として「ぐんま絹遺産」に登録されています。

鈴木家は代々名主や政治家を送り出していったことから、役人や文化人などの滞在施設としても使われ、座敷に高低差をつけた書院造りになっています。最も高い上段を「奥の殿」と呼び、奥座敷に当たる「奥の殿」からなまったものといわれています。

曲屋に訪れる多くは、都市部やバスツアーの団体などで、いろいろでパチパチと燃える薪、太くてずっしりとした